

2021年5月NHK東北地方放送番組審議会

5月のNHK東北地方放送番組審議会は、20日(木)、NHK仙台拠点放送局(ウェブ開催)において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、東北ココから「思いのまま“不登校”を語るTV」も含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、6月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	佐藤 美嶺 (防災士)
副委員長	佐藤勘三郎 ((株) ホテル佐勘 代表取締役社長)
委員	丑田 香澄 (一般社団法人ドゥーラ協会 理事)
	桂木 宣均 (日本地下水開発(株) 代表取締役社長)
	鷹山ひばり (七戸町立鷹山宇一記念美術館 館長)
	南條 和恵 (仙台大学柔道部女子監督)
	西内みなみ (桜の聖母短期大学 学長)
	松沢 卓生 ((株) 浄法寺漆産業 代表取締役)
	宮川 宏 (河北新報社 論説委員会委員長)
	八代 浩久 (東北インフォメーション・システムズ(株) 取締役社長)

(主な発言)

<東北ココから「思いのまま“不登校”を語るTV」

(総合 5月15日(土)放送) について>

- 番組を見て感じたことは、出演者の人数が多すぎたのではないかという点だ。不登校の子どもたち、その親の気持ちそれぞれに分けて、もう少し時間をかけて聞きたかった。教室の前に立つと泣いてしまう、学校に行けない自分が非常に悔しいなど子どもたちの話を聞いて、どうしていいか分からない、何でそういうことになっているのかというところが焦点なのではないかと思った。結論は出ないテーマだと思うが、ある程度の道筋をつけられるような番組だったらもっとよかったと思った。また、学校に行かなくても、社会に出たときに、どのような生き方ができるのか、親が子どもに話す機会を作ることは重要だと思う。番組内で親の話の中にそのような話題もあったらよかったのではないか。とても考えさせられるテーマだったが、もう少し深く、

出演者の人数も制限した構成で見てみたかった。

- この番組が、過去に秋田と山形で制作された不登校をテーマにした番組の放送後、視聴者からの反響を取り入れて作られたということで、NHKが本気で不登校という問題に立ち向かっていることがよく分かった。不登校に悩む子どもたち同士で話しをするだけではなく、不登校を経験した人に悩みをぶついたり、質問したりする場もあり、とことん寄り添って向き合う構成になっていたと思う。出演した子どもも含め、番組を見た今不安を感じている子どもたちも勇気づけられたと思う。子育てをしている人や子どもたちを指導する立場の人にとって勉強になる内容で、さらに不登校についてあまり興味のなかった人にも考えるきっかけになったと思う。大人がさまざまな場面で、もがいている子どもたちを受け入れる懐の大きさを持った社会にしていかなければいけないと考えさせられた。なぜ不登校の子どもたちが増えているのかという点ももう少し掘り下げてほしかった。
- 番組に参加した子どもたちが、自分の思いや疑問点を話したり聞いたりしたことで、気持ちが楽になったと話していたことが印象に残った。テレビの番組としてみんなまで話し合う場を設けたことは非常にいいことだと思うが、自治体や支援団体などが自由に語り合える常設の場を設けることが必要なのではないかと思った。当事者がいかにそのような場を必要としているかということが伝わってきた。また、一般的に学校に行くことが絶対だという価値観に縛られている人が多いことにも気づかされた。ホームスクーリングを実践している子どもをサポートしている松浦真さんの話から、学校へ行かないことは悪いことではなく、学校に行けない人たちが選択できる学習環境を整えることが必要だということが伝わってきた。不登校を経験しても活躍している人がたくさんいることも分かり、その存在は、子どもや親にとっても励みになったと思う。今後も内容を深めた番組を期待している。
- 自分には関係ないと思って、チャンネルを変えてしまう人も多い性質の番組だったと思うが、悩んでいる人に届けたい、寄り添いたいという熱意が伝わる内容だった。学校に行けないことで追い詰められている子どもたちに、知る機会、つながる機会を提供し、当事者に救いの手を差し伸べる企画だったと思う。たとえ小さくても、誰かが切実に求めるものを番組化したというその試みがすばらしいと感じた。幅広い情報が紹介され、大人が楽しんで生きる姿を見せることが大事だということなど、当事者しか語れないことばがたくさんあった。松浦さんの「不安を解消するためにこそ自分を大事にして元気をためてスキルを生かす」という話が印象的だった。学校に行かずにもどのように学ぶことができるか、子どもの学びをどうやって支えていけばいいのかという視点でも掘り下げていってほしい。ただし番組の放送時間が当初の予定から変

更になり、見逃した人が周りにいたので、夜の時間帯で再放送を検討してほしい。

- 「思いのまま“不登校”を語るTV」というタイトルが、どのような番組なのか分かりにくいと感じた。さまざまな立場の人が意見を話していくので、内容をまとめるのが難しかったと思うが、司会を務めていた不登校新聞編集長の石井志昂さんの仕切りが非常によかった。座談会に出ていた子どもや保護者も緊張していたと思うが、石井さんが的確に声をかけて、うまくまとめていたと思う。ホームスクーリングという制度や、1,000人当たりの不登校の子どもの数が宮城県が全国で最多だということなど、新しい知識も得られた。さまざまな問題点を取り上げた興味深い番組だったと思う。今回は当事者がありのままのことばを語ることを重視した構成だったと思うが、テレビを見る側としては、ある程度、落としどころが明確に見えていたほうが見やすかったと思う。不登校の問題について関心のない人に、どうすれば興味を持ってもらえるのか、番組の見せ方にもう少し工夫があればよかったと思う。
- 不登校の当事者ではないと、なかなか興味を持ってみるのが難しい番組だったと思う。当初は4月23日(金)の午後7時30分から放送予定だったが、その時間帯に不登校というテーマで当事者のオンライン座談会を放送する意義はどこにあるのかと考えてしまった。ただ番組を見て、不登校に悩む子どもたちが同じような気持ちや悩みを持つ人たちと接し、話を聞く場があることで、今後の自分自身の行動を考えるヒントに繋がる機会になっていたのではないかと感じた。テレビという媒体を通して、話し合う場を設ける取り組みとしては、非常に意義があったのではないと思う。ただ、多くの視聴者に届くかという点でみるとなかなか難しい。72分という時間も長かったと感じた。
- オンライン会議形式のマルチ画面で複数の出演者が議論する演出だったため、スムーズに進行するか懸念していたが、さまざまな工夫により最後まで違和感なく見ることができた。発言者のプロフィールをそのつど、画面にスーパーで表示していた点も分かりやすかったし、司会に不登校の人たちの情報発信を行うNPOの代表であり、自身も不登校を経験した石井さんを起用した点も当事者や保護者に寄り添っており、コメントをうまく引き出せていた。NHKではほかにも非行に関する問題など、集団で暮らしていくうえで避けることのできない社会全体のさまざまな課題を伝えているが、今後も社会に通底している問題については深く掘り下げて伝えていって欲しい。
- 番組を見て、さまざまな理由や環境で不登校になってしまうというリアルな現状を知ることができた。また、不登校の経験者や保護者など、それぞれの考え方やアドバ

イスを聞いて、不登校の問題についてより理解が深まった。不登校の子どもたちを番組を通じてつないでいくという取り組みは興味深いことで、悩んでいるのは自分だけではないということが伝わったと思う。同時にオンラインでつながる仕組みを活用していて、今だからできる企画だとも思った。それぞれの安心できる場所から参加できたことで、気張らずに本音が話しやすかったと思う。延べ8時間、語り合ったということで、番組の力の入れ方、意気込みを感じた。東北だけではなく全国的な課題だと思うので、もっと多くの人に見てもらえる工夫をしてほしいと思った。内容的には、見応えのある番組だったが、長すぎると感じた。飽きさせないようにコンパクトに絞ったほうが見やすかったと思う。

- 世代を超えた座談会が実現している番組だった。不安ということばがキーワードで、自分が何に不安を持っているのかということ子どもたちがことばにできたことが重要だと感じた。自分の人生を楽しむ大人の姿を見せると、子どもたちも気が楽になるということが伝わってきた。今回は、不登校を経験しても社会で生き生きとしている大人が出演してたが、40代、50代で引きこもりになっている人もたくさんいると思う。参加した子どもたちの不安は、そうはなりたくないという不安のようにも感じた。不登校の先には、ひきこもりの課題も見えてくると思う。今後も、内容を深めて取材し、さらなる番組を期待している。
- 不登校に悩んでいる当事者と不登校の子どもの気持ちを理解したいと思っている人の両方にとって、発見の多い番組だったと感じた。長年、不登校に向き合ってきた石井さんが司会を務めたのも適切で、新型コロナウイルスの影響で学校に行けなくなった子どももいる時代に、共感しながら番組を見た視聴者も数多くいたのではないかな。この番組を視聴した不登校の当事者から話を聞いたが、座談会ならではの形式のおかげで、多くの人の意見を聞くことができ、リモートだからこそ参加者が自分の気持ちを正直に伝える事ができたのではないかと話していた。一方、保護者が泣いているような重い場面は目を背けたくなるし、反対に番組のトーンが軽過ぎると、「自分はこんなに苦しんでいるのに軽く見られているのではないか」とも思ってしまうということだった。不登校の当事者にとって最も辛いのは自身の選択について周囲の理解を得られにくいことにあると思う。当事者である子どものタイプに合わせ、不登校も含めさまざまな選択肢から自分に合った選択をすることも一つの手段であるという認識が広まるとよいと思う。不登校の当事者がさまざまな選択を行うヒントを提示してくれる番組作りに期待したい。

(NHK側)

今回の番組は、不登校の子どもたちとその保護者が不安や

悩みを思いのままに語り合い、不安や悩みを少しでも軽減できる場を設けたいということで制作した。今、単元、教科の学びだけに縛られない多様な学びが求められている。そのため何が必要なのか、子どもたちが今どのようなことに悩み、不安を感じているのか、その声に真摯（しんし）に耳を傾けることが必要だと考えた。この番組で終わりということではなく、今後、地域の人や教育関係者なども交えて、つながりの輪を広げていき、地域全体で学びの支援体制を作り上げる動きを、番組を通して後押ししたいと考えている。

（NHK側）

できるだけ当事者の声をそのまま届けたいということがこの番組の大きな意図だった。今回、当事者どうしで語る場を設けたことで、これまで分からなかった本音を引き出すこともできた。一方で、それぞれの立場から、意見を話してもらうことを大切にしたいために、内容が深まっていけない部分もあったと思う。そのバランスが難しいと感じた。また、不登校について関心のない人に対して、どうすれば見やすくなるのかという点は今後、模索していきたい。

<放送番組一般について>

- 5月15日(土)の「大好き♡ 東北 定禅寺しゃべり亭～秋野暢子さん～」を見た。秋野さんの人柄や被災地の支援活動をしていることなど、魅力が存分に伝わる内容だった。大人が子どもの力を見抜けるかどうかという話や考え方がとてもすてきだと思った。新しい人の魅力を知るきっかけや刺激を与えてくれるというテレビのよさを感じた。また、NHKプラスで地域放送の番組も見られるようになりうれしい。NHKプラスのサービスについて、もっと多くの人を知る機会を作ったほうがいいと思う。
- 5月16日(日)のNHKスペシャル「ビジョンハッカー～世界をアップデートする若者たち～」は、ビル・ゲイツさんが、今注目している社会問題の根本的な解決に取り組む若者たちを紹介した番組だった。経済的に教育を満足に受けられない子どもたちの支援活動をしているNPO法人の李炯植さんが、さまざまな立場の方の協力を取りつけながら活動していく様子に感心した。今、社会を変えるということは、このような人たちの活躍があるからなのだと思う。ビル・ゲイツさんが「若い人が未来を

見据えて社会の大きな不公平に立ち向かうことはすばらしい、非常に期待している」と話していたのが印象的だった。ナレーションは、若者に人気がある声優の小野友樹さんだったのもよかった。若者がこうした問題に関心を持つきっかけになると思う。世界中のビジョンハッカーを取り上げるなど、続編にも期待したい。

- 4月29日(木)のあの日 あのとき あの番組「古賀稔彦さんがのこしたもの」(総合 後1:50~3:00)は、NHKアーカイブスに残る番組や映像で古賀さんのことを語る番組だった。ゲストは柔道家の山口香さんと野村忠宏さんの2人で、話しも上手で、最適なゲストだったと思う。今回、取り上げられた番組「ドキュメントにつぼん 三四郎の雪辱」はとてすばらしかった。古賀さんが試合で勝てなくなり、落ち込んでいったときの様子を取り上げていて、自分自身の悔しさが残っている部分にチャレンジをする姿が潔くてとてもよかった。番組を見て、まだまだ自分自身もチャレンジしたいと勇気もらった。また、古賀さんの家族や近い人の話を聞く別の番組なども制作して、古賀さんにまつわる記録を残して行ってほしいと感じた。
- 4月29日(木)のプロフェッショナル仕事の流儀「サンドウィッチマンスペシャル」(総合 前10:05~11:17)を見た。宮城県出身で、上京してからの苦労話や東日本大震災での経験などが語られていた。彼らのことばから、日本一愛されるお笑い芸人たる魅力は、謙虚な人間性とお互いを尊ぶ気持ちだということが伝わってきた。「背伸びしなくていい、誰かのためなら頑張れる、毎日が奇跡、あいつがいるから大丈夫、コンビニの夢はずっとコンビニであり続けること」などが印象に残った。最もおもしろかったのは、プロフェッショナル仕事の流儀の取材が入っていると聞いたときの周りの芸人のリアクションだった。残念だったのは、2人がたばこを吸いながら話す場面が多かったことだ。密着取材だったので仕方ないのかもしれないが、若い人や子どもにはあまり見せたくないと思った。
- 5月1日(土)の【ストーリーズ】事件の涙「たどりついたバス停で~ある女性ホームレスの死~」を見た。新型コロナウイルスの影響で仕事も住む所も失い、路上生活を余儀なくされた女性が身勝手な犯行によって命を奪われた事件に対し、「他人事とは思えない」という声が女性を中心に数多く寄せられたのをきっかけに、被害者を丁寧取材した番組だった。社会の一員であった被害者が、さまざまな事情や制約によりいつの間にか自身と社会との間にできてしまった壁を乗り越えられなくなっていった事実を見つめた番組で、「現代における社会とはなにか」を考えられるきっかけになった。最後の「人通りや交通量も多いバス停の光に社会との接点を求めているのではないか」というナレーションが胸にしみた。今後も現在社会に潜む問題を深く掘り下げてもらいたい。

- 5月3日(月・祝)～5日(水)の「そして『みんなのうた』は生まれた」(総合 前6:10～6:30)を見た。懐かしい楽曲の誕生秘話を聞くことができ、楽しく見られる番組だった。加えて、みんなのうた60記念ソング「こんど、君と」の制作を担当している小田和正さんの楽曲に込めた思いを知ることができ、アーティストが「みんなのうた」に特別な思いを持って楽曲を作っていることがうかがい知れた。これからも心に残る「みんなのうた」を提供し続けてほしい。家族で楽しく見られる大型連休向きの番組だと感じた。
- 5月5日(日)のダーウィンが来た! 15周年SP「その手があった! 絶滅レスキュー大作戦」を見た。日本の絶滅危惧種を守る活動を紹介したスペシャルで、豊かな暮らしを求めた人間が動物の生活の場を奪っていった事実を伝えた一方で、動物の生息しやすい環境を取り戻すことができるのも人間であるということ、学ぶことのできる番組であった。
- 5月15日(土)の【ストーリーズ】ノーナレ「シュガーデート」(総合 後10:40～11:10)を見た。SNSなどを通じて男性と知り合い、食事やデートをするたびに金銭的な援助を受けるという“パパ活”。その実態に迫る番組で、女性をあっせんする人も取り上げていた。どのように男性と知り合ったかという点を、細かく伝える場面もあり、自分もやってみたいと思う女性も出てきてしまうのではないかと不安に思った。NHKが取り上げるべきテーマではなかったのではないか。
- 連続テレビ小説「おかえりモネ」を見ている。語りとヒロインの祖母役の竹下景子さんが、かきに生まれ変わったという設定だが、なぜかきになったのか、今後どのように描かれるのか気になった。ヒロインの周りの登場人物が豪華で、個性がまだ出しきれていないように感じている。周囲からは、宮城ことばが強過ぎて違和感があるという話もあった。
- 連続テレビ小説「おかえりモネ」を見ている。森、海、山の宮城の美しい自然、ヒロインの清原果耶さんのフレッシュさ、現代が舞台なので親近感を持ちやすく、トータルして爽やかで晴れやかな気持ちにさせてくれる作品だと感じている。人が集まるシーンなど、新型コロナウイルスの影響でも工夫して撮影したのだと思うが、見ていてうれしくなった。高木正勝さんの音楽や主題歌の「なないろ」は、このドラマの若者の葛藤や乗り越えていく心のさま、映像美にぴったりだと感じている。これから先の展開をととても楽しみにしている。

- 連続テレビ小説「おかえりモネ」は、地元の期待が高いと感じている。ヒロインの清原果耶さんのフレッシュさ、鮮やかな色の衣装が多く、空の青さや海の青とうまく溶け合っていていいと思う。新田サヤカを演じる夏木マリさんの存在感が際立っていて、全体的にいい雰囲気をつくっていると思う。貞山政宗公の遺訓がある新田家のセットだが、全体的な統一感を出したほうがいいと思った。主題歌は時節を得ていてとてもいい。エンディングで視聴者からの投稿写真を紹介する「観天望気」というコーナーも楽しませてもらっている。
- 連続テレビ小説「おかえりモネ」を見ている。海や山などの開放的なシーンが多く、見ている人を心地よい気分させてくれる。今後も宮城県の自然の雄大さや魅力をアピールするような撮影に期待したい。加えて、主題歌である「なないろ」を担当しているロックバンドの楽曲は音楽も歌詞も素晴らしいので、主題歌以外の楽曲もドラマの中でぜひ活用してほしい。
- 大河ドラマ「青天を衝（つ）け」を毎回楽しみに見ている。冒頭で、俳優の北大路欣也さんが演じる徳川家康が時代背景や登場人物を紹介する演出がおもしろい。地図や年表のパネルを自在に操って描き出すパフォーマンスに感心している。徳川家康の目線で幕末の時期を語るところが新鮮だと感じている。明治維新以降は、どのように語っていくのか楽しみだ。また、それぞれの登場人物を丁寧に描き出していると思う。特に井伊直弼や徳川慶喜の描き方が特徴的だと思った。俳優の草薙剛さんのぼう洋とした中に一本筋が通った演技がすばらしく適役だと感じている。渋沢栄一役の吉沢亮さんもエネルギッシュでいいと思う。渋沢栄一の妻千代役の橋本愛さんも控え目だが芯が通った女性を好演している。今後の放送に期待している。
- 4月17日(土)のE TV特集「エリザベス この世界に愛を」(Eテレ 後 11:00～11:59)は、日本で在留資格がなく入管施設に収容されている外国人たちの心の支えになっているナイジェリア人の女性を追ったドキュメンタリーだった。入管行政の問題点や強制送還の恐怖と闘いながら日々暮らしている外国人の人たちの苦悩がよく分かる素晴らしい番組だった。国会で出入国管理法の改正案の審議が行われている中での再放送で、タイムリーだったと思う。
- 4月24日(土)の「我が心の大滝詠一」(BSP 後 9:00～10:29)を見た。大滝さんの歌をじっくり聴かせる内容で非常にぜいたくな時間を味わうことができた。さまざまな趣向で大滝さんの曲が演奏されてよかった。小林旭さんや薬師丸ひろ子さんが歌うなど聴き応えがあった。大滝さんの盟友、作詞家の松本隆さんも登場し、大滝さんの人柄や音楽家としての特徴が分かるようになってとてもよかった。

- 「ウルトラセブン4Kリマスター版」を毎回楽しみに見ている。劇中の音楽が濁って聞こえる。映像がきれいになっているので、音源もクリアだとさらによくなると感じている。

NHK仙台拠点放送局
番組審議会事務局

2021年4月NHK東北地方放送番組審議会

4月のNHK東北地方放送番組審議会は、15日(木)、NHK仙台拠点放送局(ウェブ開催)において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、新年度に始まった番組およびリニューアルした番組も含め、一般番組について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、5月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	坂田 裕一 (NPO法人いわてアートサポートセンター 理事長)
副委員長	佐藤 美嶺 (防災士)
委員	丑田 香澄 (一般社団法人ドゥーラ協会 理事)
	桂木 宣均 (日本地下水開発(株) 代表取締役社長)
	佐藤勘三郎 ((株) ホテル佐勘 代表取締役社長)
	鷹山ひばり (七戸町立鷹山宇一記念美術館 館長)
	南條 和恵 (仙台大学柔道部女子監督)
	西内みなみ (桜の聖母短期大学 学長)
	宮川 宏 (河北新報社 論説委員会副委員長)
	八代 浩久 (東北インフォメーション・システムズ(株) 取締役社長)

(主な発言)

<新年度に始まった番組およびリニューアルした番組

並びに一般番組について>

- 4月2日(金)の東北ココから「お帰り！田中将大投手 日本一をふたたび」を見た。最初にアメリカ球界での活躍を振り返る映像があり、さらに、日本でプレーしていた際、東日本大震災の被災地に足を運んでいたこと、日本一になったことなども含めて紹介されていてよかったと思う。また、スタジオゲストの元投手の斎藤隆さんのコメントも的確でよかった。田中投手が戻ってきたことに対して、他球団の選手のコメントを紹介することで、多面的に人物像が見える構成になっていたと思う。渡米前と大リーグ移籍後の田中投手の変化を映像と表で見せていた部分は、非常におもしろ

かった。ただ、最後に田中投手が被災地に足を運んで少年と交流を持ったという話題があったが、紋切り型のような気もした。

- 4月9日(金)東北ココから「新型コロナ “危機”をどう乗り越えるか」(総合 午後7:33~8:13)を見た。3人の専門家が出演し、解説をしていたが、新しい情報を提供していたと思う。都市の規模、経済的な規模が似ている宮城県と広島県の感染者の推移状況の分析はとてもわかりやすかった。また、変異株の動向に焦点を当てているのもよかったと思う。ただ、医療や病床のひっ迫という部分に関しては、東北からの視点で問題点を洗い出してほしかった。また、致死率のデータに関して、地域性や感染者における年齢構成比などもあると思うが、他の要素が関係していないかもう少し深く切り込んでほしかった。
- 4月9日(金)の「東北ココから」を見た。クラスターが起こった介護施設に応援で入った方を取材していたが、個人の生活を犠牲にして働いていることを知って、はっとさせられた。今、感染者が増加している中で、私たち自身がより気を引き締め、周囲に注意を呼び掛けるなど、感染拡大を抑えるために気を配らなくてはならないという気持ちになった。また、さまざまなデータを紹介していたが、国分町の人出や、広島県と宮城県の患者数の推移の比較などが分かりやすかった。変異株に関しては、もう少し詳しい説明がほしかった一方で、専門家の方々が、以前よりも変異株に関するデータが蓄積してきているので、極度に恐れなくていいと言っていたことは心強く感じた。今後も新しい情報があれば伝えていってほしい。
- 4月3日(土)の被災地からの声 つぎの一步「宮城県仙台市」を見た。番組名の「つぎの一步」ということばがとてもいいと感じた。番組冒頭に、津田アナウンサーが「大きな一步も、ごく小さな一步も一切差はありません。10年たって次の一步はまだないということを伝えるのも大事な使命です」と話してから始まったが、とても心に響いた。被災地の希望や課題を提示するのではなく、一つの事実としてそれぞれの声を紹介していくのが、この番組のいいところだと思う。以前に出演した方に当時のVTRを見てもらう場面で、性格や気持ちは今も変わらないという話があり、変わらないというキーワードが印象的だった。短い時間の中で、今の気持ちがしっかりと伝わる構成になっていると思う。さまざまな場所、立場の方をまんべんなく取材しているこういう番組はあまりないと感じているので、ぜひこれからもたくさんの声を紹介してほしいと思った。
- 4月10日(土)の被災地からの声 つぎの一步「福島県富岡町」を見た。タイトルが「つぎの一步」となったことで何か変わるのかと予想していたが、進行はこれまで

と同じだった。津田喜章アナウンサーが「10年は通過点であり、このまま事実を伝えていだけで」と話していたのが印象的で、このままの形がいいと思った。被災地の復興にはまだまだ時間がかかる。これからも困難に立ち向かう人々を取り上げていってほしいと感じた。

○ 3月26日(金)の「はまなかあいづTODAY」を見た。オリンピックの聖火リレーが福島から始まり、たくさんの取材が来て大騒ぎになるのではないかと案じていたが、密を避ける取材体制になっていた。NHKと民放との連携が非常に進んでいることが大きいと感じた。災害時も、テレビ局同士の連携がさらに進むといいのではないかと改めて感じた。

○ 新年度に入り「やままる」の出演者が新しくなった。男性キャスターの金子峻アナウンサーの口調は、きりっとしていて聞きやすく、爽やかな印象だ。女性キャスターは隔週で入れ替わる体制だが、キャスターで1人、原稿を読むスピードが早く聞き取りづらい方がいる。どのような指導、教育をしているのか。キャスターにもアナウンス力を維持、向上するための施策を行ってほしい。
また、地方局に1人は女性アナウンサーを配属してはどうか。

(NHK側)

今、番組のキャスターは若手も多く、その育成が差し迫って重要な課題だと思っている。ニュースについては、あらゆる年代の人が理解しやすい速度で話すことを基本的には指導している。育成の機会については、各局の管理職による指導もあるが、仙台局や東京の経験豊富なアナウンサーによる全国的な指導の機会を作っている。

○ 3月31日(水)の歴史探偵「参勤交代」を見た。「歴史秘話ヒストリア」の後継番組という位置づけだと思うが、なぜ探偵事務所スタイルにしたのかよく分からなかった。この番組は、新しい説を検証するような番組だと思うが、もう少しアカデミックな基調にして、学識経験者や考古学の専門家を交えながらテーマを深く掘り下げていく構成にしたほうがいいと思った。アカデミックな歴史とエンターテインメントの両方を追求するのであれば、2009年から数シーズン放送された「タイムスクープハンター」という番組がおもしろかったので、参考にしてほしい。

○ 3月31日(水)の「歴史探偵」を見た。テーマに沿った再現ドラマを見ながら、俳

優の佐藤二朗さんふんする探偵所の所長が突っ込みを入れる演出で、明るく佐藤さんのカラーが出ている番組だと感じた。「歴史秘話ヒストリア」を見ていた人からすると、もう少し落ち着いた雰囲気がいいと感じる部分もあると思う。また、視聴者の知りたいという部分に切り込んだり、歴史にいざなってくれるような点が弱いと感じた。親しみのあるNHKを出しているのかもしれないが、硬質で奥深い歴史番組のよさもある。NHKでなければ制作できないものを作ってほしいと思った。

- 3月31日(水)の「歴史探偵」を見た。俳優の佐藤二朗さんが視聴者の目線で、質問したり驚いたりしながら番組が進んでいったので、歴史への興味が薄い視聴者でもとても楽しく見る事ができた。今回は参勤交代に絞られた構成で、情報過多にならず見やすかった。さらに、探偵事務所という設定で、調査をしていく形なので、何が新たに分かったことなのか、何を発見したのかという説明が明確で分かりやすかった。大名行列の準備をした大島左源太の子孫の家から見つかった新資料を基に再現されていたが、初めて知ることが多かった。人間味を感じるエピソードもあり、私たちの生活の延長に昔があったと感じることができた。ただ、以前まであった「歴史秘話ヒストリア」の最大の魅力、人間模様やストーリー性が、この番組にはなくなってしまったように見えて残念だ。歴史に興味がある方にとっては物足りなさを感じるのではないか。
- 3月31日(水)の「歴史探偵」と4月1日(木)のダークサイドミステリー「笑顔が暴力を生んだ夜～なぜ人々はヒトラーに従ったのか？」を合わせて見た。2つの番組は、通説ではなく、少し違う角度から見たミステリアスな部分を軸とした番組という点で共通点があると思う。ただ、「ダークサイドミステリー」はきちんと向き合って作られた番組だが、「歴史探偵」は歴史にあまり詳しくない人にとっては分かりやすいかもしれないが、歴史好きにとっては物足りないと思う。これから歴史番組はどちららに向かっていくのか。分かりやすさだけにとらわれず、きちんと向き合う番組を作る勇気を持たなければいけないと思う。そして、もう一つの共通点は、アナウンサーの活躍だと思う。両番組に出演していたアナウンサーは、ニュースを読んで解説する読み手としてのアナウンサーというよりは、きちんと語れるアナウンサーだと思う。自分の考えをしっかり持ち、自分のことばで語れるアナウンサーが必要だと思う。自分のことばで話せるアナウンサーになるためには、地域を知り、地域の人と触れ合うことが必要だと思う。東北にもすてきなアナウンサーがたくさんいる。どんどん地域に出て活動してほしいと思っている。
- 4月3日(土)の【ストーリーズ】ノーナレ「1/2525 行方不明の同級生と僕たちの10年」(総合 午後10:40～11:10)は、東日本大震災で行方不明になった瀬尾

佳苗さんの同級生が彼女の人柄や思い出を語り合う番組だった。ディレクターがその同級生の一人ということで生まれた番組で、こうした番組の作り方もあるのかと非常に感心させられた。会社経営に行き詰まった同級生の1人は、瀬尾さんだったらどう行動するかと考えながら、彼女の存在を心の支えにして苦境を乗り切ろうとしたり、結婚して子どもを産んだ別の同級生は、震災直後に瀬尾さんに送ったメールの内容を今も後悔し続けているなど、さまざまなエピソードを通して、瀬尾さんに対する深い思いが浮き彫りになっていた。ディレクターと出演者の距離が近く、カメラの前で素直に心情を明かしていることが伝わり、地味ながらもとてもいい番組だと思った。

- 4月4日(日)の明日をまもるナビ(1)「住んでいる場所の災害リスク」は、相次ぐ大災害からどう身を守るかというテーマで、ハザードマップの活用について取り上げていた。この番組は一般市民の目線でさまざまな問いかけをし、その解決方法を地域ごとに見ていく形で、分かりやすい番組だと思った。ただ、ハザードマップの中には避難所について、どのような心構えで行けばいいのか、どういう方たちがどのように開設し、運営されているのかは書かれていない。避難所に指定された公共施設でも人事異動などで必ずしも避難所の運営に長けた人ばかりがいるわけではないので、ぜひハザードマップの活用とともに、避難所の運営はどうあるべきかといった視点で、一般市民の理解にもつながるような形で取り上げてほしいと思った。
- 4月6日(火)のクローズアップ現代+「生理の貧困・社会を動かす『女性全体の問題だ』」を見た。男性中心の社会の中で、女性の生理に対してはタブーの面があって、理解されていないと感じていたので、まさかテレビで生理について取り上げるとは思わなかった。お金がなくて生理用品が買えず自分で手作りをしている女性を取材していたが、生理用品を買えることが当たり前ではなく苦しんでいる人が多くいること、親が買ってくれないという事実もあることを知り大きなショックを受けた。当たりの話が当たり前ではない現代社会について、このテーマを番組で取り上げたことは非常に意義のあることだと思う。ぜひ今後もこうした問題についてもっと取り上げてほしいと思った。
- 4月6日(火)の「クローズアップ現代+」を見た。「生理の貧困」ということばにインパクトがあり、貧困問題に関心を持ってもらうには重要なテーマだと思った。番組を見終わってこの国の性教育の貧困を痛烈に感じた。さまざまなデータと共に「生理」について全国放送で紹介したことは、女性の問題ではなくて、社会的な課題だということを明確に打ち出すことになったと思う。諸外国でトイレットペーパーは非課税なのに、なぜ同じ生理現象の女性の生理用品が課税されているのかということが取り上げられて、インターネット上での運動につながった例も紹介された。グローバル

な視点からこの問題を取り上げたことはとても意義のあることだと思った。

「クローズアップ現代+」が今年度でなくなるというインターネットのニュースを見たが、硬派で取材力抜群の問題提起型の番組が改編によってなくなるということが本当だとしたらとても残念だ。今後もぜひNHKの核になるような番組を大切にしていってほしい。

- 4月8日(木)のSONGS「N i z i U」(総合 午後 10:30~11:15)を見た。専門家を呼んで楽曲の解説をしたり、なるほどと思える内容が多かった。各世代からのメッセージを募集して紹介していたが、ファンの声に触れて出演者もファンを好きになるなど、出演者が喜ぶ仕掛けがいいと思った。時間を移設しての45分に拡大したことで、フルコーラスで音楽をしっかりと楽しめる、そして新しいことも知ることができるというすばらしい音楽エンターテインメント番組になっていると思う。
- 4月9日(金)の第97回競泳日本選手権~東京2020オリンピック代表決定戦~「第7日目」を見た。池江璃花子選手の頑張りで今励まされている人はたくさんいると思う。池江選手に注目が集まっているが、そのほかの選手も平等に紹介していたのがよかった。ただ、オリンピック出場への選考基準の説明が不足していたように感じた。出場枠はどのくらいあるのかなど、ボードにまとめて出すなど、もう少し選考条件を細かく紹介してほしかった。
- 4月10日(土)のNHKスペシャル「池江璃花子 新たな挑戦」は、第97回競泳日本選手権の直後に池江選手が生出演していた。白血病という大変な病気の治療を乗り越え、さまざまな練習、努力をして、今回の大会で金メダルを4つも取ったということに大きな感動を覚えた。池江選手が「私は今まで勝負、勝つか負けるか、それしか考えていなかったけれど、病気になって初めてその勝負の前にある壁、努力をする壁というものに自分は気がついた」と話していて、涙が出てきた。彼女の人間としての努力というものに感動したのだと思う。人間は、努力をしても花が咲かないときもあると思う。それでも努力をして花を咲かせる、それが人間としての生き方だと思う。そして、陰に隠れてひっそりと咲いた花にも目をやって、人間のその努力の結果を褒めたたえなければいけないと思った。人が努力する姿は、大きな力を与えると感じた。
- 4月10日(土)の「ストーリーズ 羽生善治~天才棋士 50歳の苦闘~」を見た。最近の将棋界は、藤井聡太八段など若手棋士が台頭している。かつて7冠を保持していた羽生九段が3年前から2冠だったということで、将棋界が大きくさま変わりをしていることに驚いた。羽生九段がインタビューで、「2日間、お互い16時間、盤の前に座っているということだけで結構疲れそうだと思いますか」と笑いながら語る

姿に、これからも自分は将棋の世界で生きていくという決意が感じられて、ますます応援したいと思った。番組を見て、羽生九段にとってタイトル戦に勝つことも一つのゴールだと思うが、それ以上にずっと挑戦し続けることが最も大事なことなのだと感じた。中高年層にとって、これからの生き方を考えるヒントになったと思う。映像やナレーションから、制作者が羽生九段と良い人間関係を作っていることが感じられた。

- 4月10日(土)の【特集ドラマ】流行感冒(BSP 後 9:00~10:13)を見た。志賀直哉が書いた小説が原作で、大正時代のスペイン風邪の流行をドラマにしていた。新型コロナウイルスに翻弄される現代と同じようなことが100年前にも起きていたことがよく分かった。見えないウイルスにおびえて、他人を思いやる心を失い、心理的に追い詰められていく人間の醜さ、滑稽なまでのエゴイズムが見事に描かれていたと思う。現代人に対してリアリティーのある警鐘を鳴らしたドラマだった。俳優の本木雅弘さんや安藤サクラさん、古川琴音さん、石橋蓮司さんなど、大正時代の雰囲気を出してリアリティーのある演技でとてもよかった。こうした番組を今後も制作して、新型コロナウイルスについて医学的、経済的に克服したことだけではなく、真の意味で人間として新型コロナウイルスを克服することを伝える番組を期待している。
- 4月11日(日)の「ニュース 地球まるわかり」は、アメリカでのアジア系住民に対するヘイトクライムが増加しているという問題について、時間をかけて取り上げていたので、しっかり理解することができた。スタジオのセットが空港をイメージしていて、海外に行きたいという気持ちにもなった。一番気に入ったコーナーは「旅する世界」というコーナーで、マレーシアで人気のチャーシューワンタン麺を取り上げていた。食べ物のお話は身近に世界を感じられ、より興味を持てるテーマだと思うので、今後も食のお話を取り上げてほしい。世界で起きていることを知ることは大切なことで、国際情勢を身近に感じられるこの番組は大変意義があると思う。
- 「ニュースウォッチ9」や「クローズアップ現代+」のメインキャスターが交代し寂しく感じている。後任のキャスターがまだ硬い感じがし、「ニュースウォッチ9」については、番組全体がまだこなれていない印象を受けている。
- 「列島ニュース」を見ている。九州の何かのイベントを紹介したニュースで、「いついつ開催するとのことです。十分な熊対策をするとのことです。来場者は何人くらいとのことです」と、同じニュースの中に「~とのことです」というフレーズが3~4回出てきたことがあった。これまでもニュースや災害報道のときに使われていたと思うが、あまりにも使い過ぎると、違和感がある。本当に取材したことなのか、自分が聞いたことをそのまま伝えているだけで責任逃れのように感じてしまった。もっと

違う表現で伝えられないか。せめて1つの話題で1～2回にするなど、ルールを作って報道してほしいと思った。

(NHK側)

NHKでは「です・ます」で言い切るという指導をしている。「です・ます」ではっきりと伝えることで、正確性、信頼性にもつながると思うので、意見を参考にしながら、日々表現には気を付けたいと考えている。

- 3月28日(日)のこころの時代～宗教・人生～「なんでやねんと ええやんか」は、京都精華大学の学長のウスビ・サコさんのお話だった。故郷のマリ共和国で、広い中庭のある家で、さまざまなタイプの人々に囲まれて育ち、相互扶助、関わり合いの空間の存在が有用だと話していた。激動の社会のかじ取りをしていく次世代にとって、さまざまな選択肢を知ることや、たくさん大人に出会うことに価値があると感じているので、番組から背中を押してもらった気がする。サコさんも、絶対的な解決策のない時代に突入するからこそ、本当にそうなのかと問える力が大事だ、自分から発信することが大切だと語っていて、まるで人生の講義のような番組だと思った。また、これから「こころの時代」で新シリーズ「瞑想でたどる仏教」が始まると紹介されていたが、今の時代に多くの人が心を向けて考えるような番組として期待している。
- 4月5日(月)のぼくドコ(1)「タイヤの一生」を見た。子ども向けのSDGsの番組で、私たちの生活に欠かせないタイヤが最終的にどうなるのかという内容だった。漫才師のミキの2人とモデルの山之内すずさんが軽妙な会話で、着ぐるみやCGを駆使したドラマを展開して、子どもだけではなく大人も夢中になれる社会科見学のような構成になっていた。1つの物がさまざまな物に形を変えて私たちの生活を支えているということを子どもたちに分かりやすく具体的に伝えていて興味深かった。
- 4月8日(木)のキソ英語を学んでみたら世界とつながった。(1)「どんなスポーツが好き？」を見た。これから語学を学ぶ、英語になじみが薄い人でも親しみが持てるような内容だと感じた。スイスのスポーツや食べ物、ポーランドのおもしろい文化など、リモートで海外を訪れる感覚を味わうことができる演出で、タイトルにある「世界につながる」という番組構成になっていた。演出の工夫に敬意を表したい。NHKの語学番組は、長い歴史があるが、時代の変化に対応しブラッシュアップして再構成し続けていることがすばらしい。ラジオ第2放送で新設された「小学生の基礎英語」も聞いているが、話してみたい、伝えてみたいという意欲や興味を醸成する工夫がされていると感じている。ただ、ラジオの放送後、ストーリーミングで聴き直そうとした

ときに、その音声にたどり着くのがとても大変だった。もう少し工程を簡単にしてほしいと思った。

- 4月10日(土)のBS1スペシャル「福島 幻の銘酒 十年目の復活」(BS1 午後8:00~8:49)は、東日本大震災で被災した酒蔵が、10年ぶりに避難先から地元の福島県浪江町に戻り、地酒を復活するまでを追ったドキュメンタリーだった。杜氏の鈴木大介さんのふるさとや酒に対する思いが非常によく伝わってきた。震災の1か月後、遺体捜査のために浪江町に入った消防団員が、鈴木さんの酒蔵の一升瓶が散乱しているのを見て、酒蔵の跡地にきれいに並べた。鈴木さんはその様子を写真で見て、前を向く力をもらったというエピソードや地元の幼なじみから何としても地酒を復活させてほしいという思いも描かれ、番組に厚みを与えていたと思う。ただ気になったのは、その地酒が復活したのは、米と水だけではなく、酵母の存在も大きかったはずなので、その部分にももう少し触れるべきだったのではないかと感じた。
- 最近、BSでリマスター版の番組が増えたことはとてもよかったと思う。何度見ても「プロジェクトX」は胸が熱くなる。「ウルトラセブン」や「ウルトラQ」もいい。特に「よみがえる新日本紀行」は、昔と今を比較しながら見ることができ非常に興味深い。また「ソーイング・ビー3」もおもしろい。海外で作られた番組だが、ユニークな番組を買い付けることも大事だと思う。今後ますますユニークな番組を見せてほしいと思っている。

(NHK側)

多岐にわたる番組への意見をいただき、真摯(しんし)に受け止めたいと思う。地域局への女性アナウンサーの配属については、地域に根差して働く職員の採用も行い、人事制度の改革にも取り組んでいるところだ。多くの女性のアナウンサーに地域で活躍してもらえるようにしていきたいと思っている。また、東日本大震災から10年、これからの防災減災の取り組み、社会の課題にしっかり向き合い、多様な角度から伝えていくことは私たちの使命だと思っている。「クローズアップ現代+」が今年度で廃止になるという情報がインターネット上の記事に出たが、事実ではない。今後も社会の課題にしっかり向き合う番組を作り続けていく強い意志を持っている。「歴史探偵」についても意見を真摯に受け止める。一つ一つの番組について、どのような視聴者の方々に、どのような時間帯で、どのような中身で伝えていくのか、視聴者の心

にどうやって届くのかを常に考えていく。委員の皆さんの声を受け止め、新しい番組づくりに努めていきたい。

NHK仙台拠点放送局
番組審議会事務局